

【ルネッサンスの風】

山口 孝

ペルージャの夏の宵、エンリコ・ラバのホーンを、頬に触れる風のような距離で初めて聴いた。

大噴水がある街の中心の広場は、昼間の余熱を残し、涼を求めて夜の散歩を楽しむ人々も足を止め、メディアム・スローのバラードを奏でるカルテットに吸い寄せられるように耳を傾けていた。

ウッド・ベースのアタックもシンバル・レガートのスウィングも、小さくこだまするように広場の内を駆けめぐり、静かに天空へと抜けていく。オープンにされたグラランド・ピアノのハーモニーは、薄い煙のような響きとなって、広場の片隅に組まれたステージを覆っている。一本しかないマイクは、この完璧な中世の空間に不釣り合いなほど真新しい銀色のきつい光を放っていた。思い思いの格好でステージの周りを囲む男女。ビヴラートの少ないエンリコ・ラバの吹奏には、汗のないささやくような冷たい肌合いがあった。

レパートリーにマイルス・デイヴィスとチェット・ベイカーへの想いは隠しようがない。しかし、その音楽は、ニューヨークの喧噪の内のクールな沈黙や、カリフォルニアの太陽の下のダークな頹廃とは明らかに異質だった。この古すぎるイタリアの田舎町、漆黒の空に満点の星が浮かぶ天然のステージでのエンリコ・ラバのジャズは、フレスコ画の絵の具のように、その夜の空気にとりと溶け込んでいた。

フィレンツェの滞在も一年が過ぎようとしていた。毎日かよう、サント・スピリト通りのリストランテ「ガルネッコ」。いつものあざやかさで栓を抜き、白いテーブル・クロスの上のグラスを立てると、「タカシ、このトスカナーのキャンティのワイナリーがあるモンテプルチアーノには、イタリアー美しい教会があるぞ」と言いながら、マスターはめずらしくキャンティを注いでくれた。もう、私が東京に帰らなければならないことを知っているのだ。

このキャンティが、トスカナーだということは認めたい。私は、ワインのことは判らないが、収穫量が少なく、外国に出ることもなく、このフィレンツェでも「ガルネッコ」でしか飲めないというマスターの言葉を信じている。その根拠は、この一年間逗留したホテル「ラ・スカレッタ」のワインにうるさいマンマの言葉と一致するからだ。少し違うのは、フィレンツェであまり飲めないのは、数年前からカリフォルニアのアメリカ人が、特別契約で大量に買い占めているからだということだ。毎晩飲んでいいるからかも知れないが、幸運にも私も一番美味しいと思っている。

この教会というのは、ルネッサンス以降のヨーロッパ中の教会建築のモデルになったと言われる。その名を、マドンナ・ディ・サン・ピアージョ教会という。最後に残ったモノクロのワンロールを装着し、吐く息も白い早朝のサンタ・マリア・ノヴェラ駅から汽車に乗った。

いまだ薄い霧が残るひなびたモンテプルチアーノ駅。

Renaissance

ルネッサンス

Enrico Rava Quartet

エンリコ・ラバ・カルテット

1. イット・エイント・ネセサリーー・ソー
It Ain't Necessarily So (G. Gershwin) (6:09)

2. ディア・オールド・ストックホルム
Dear Old Stockholm (Trad) (5:46)

3. グッドバイ
Good Bye (G. Jenkins) (6:11)

4. マイ・ファニー・ヴァレンタイン
My Funny Valentine (R. Rodgers) (8:52)

5. ヴイジョン
Vision (E. Rava) (5:50)

6. フラン・ダンス
Fran Dance (M. Davis) (6:52)

7. ネイチャー・ボーイ
Nature Boy (E. Ahbez) (4:19)

8. ゲニッド
Gnid (T. Dameron) (7:01)

9. ゼアズ・ノー・ユー
There's No You (H. Hopper, T. Adair) (5:44)

エンリコ・ラバ Enrico Rava (trumpet and flugelhorn)
ステュファノ・ボラーニ Stefano Bollani (piano)
ロザリオ・ボナコロソ Rosario Bonaccorso (bass)
ロベルト・ガット Roberto Gatto (drums)

録音：2002年2月12、13日 ローマ

*

Produced by Tetsuo Hara.
Recorded at House Recording Studio
in Rome on February 12 and 13, 2002.
Engineered by Simone Cianmarughi.
Mastered and Mixed by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .
Artist Management : Mario guidi
Front Cover and Inner Photos: Takashi Yamaguchi
Artist Photos : Tetsuo Hara.
Designed by Taz

2時間後のバスなど待たず、パールでタクシーを呼んでもらった。車は、どこまでもワイン畑の続く道を走った。遠方の山の上に冠を載せたような城塞都市が見える。9時を過ぎた頃、突然空が割れて、白い太陽が姿を現し、みるみると地上を照らし出した。

車を降り、巨大な門をくぐると、そこには、まるで時の歩みを無視するかのよう沈黙した中世の石の街があった。時折出合う人も、目の前をゆっくり横切る猫も音の気配を消している。眠っている街。ひたすらなだらかな坂の上の終着地は、街の中心の広場だ。未完の堂々たるファサードを持つカトリックの栄華のもののドウオーモ。ルネッサンス以来の栄光の紋章をいたるところに誇らしげに貼り付けた貴族の館。フィレンツェのヴェッキオ宮を模した市庁舎の一人が通るのがやっとの細く急な階段をつたってその鐘楼に上った。360度のパノラマ。美しすぎるトスカナー平原。碧い空に透明な空気。城壁に囲まれた無数の赤い瓦を敷いた屋根に、光と影のダイナミックなコントラストが細かく描かれる。

この景色は、あのルネッサンスの頃よりほとんど変わっていないのだと素直に思った。自然と人工なるものが、完全に一体化しているのだ。いつも、レンズを向ける虚しさを覚える瞬間である。城壁の外側のふもとに、あの教会を見つけた。それは、到底この世のものとは思えない白い幻のようにポツンと浮いていた。小さな門から一本の細い道がクッキリと見えた。

早春のその道には、黄や赤の小さな花が枯草の絨毯の

上にポツリポツリと咲いていた。風の音がした。まるで乳白色の大理石できていたようなその教会は、広大な毛足の長い緑の芝の平地に、超然としてそこにあった。形は、イタリアの町で普通にみる丸いクーポラと二つの鐘楼を持つルネッサンス様式なのだが、時の過酷な洗礼など、まるでなかったかのように、そう、昨日完成したばかりのようなみずみずしさなのである。

重い扉を押して内に入ると、そこは八角形のドームだった。全身が真っ白になってしまうほどに明るかった。キリストの受難や、信者の慟哭とは一切無縁の不思議な空間。やわら祭壇の前に立つと、天上からの光に射抜かれて、魂が肉体から遊離し、丸い天井のクーポラに吸い上げられそうになる。暖かかった。うっすらと汗かにじむくらいに。夢の内に居るような空間に立っていられず、ひざまずいてしまった。ここを天国だと、信仰を持つ者は言うのだろうか。

人っ子一人いない教会の周りを、トボトボと幾度も歩いた。どこかで、ひばりが鳴いている。ここにいるのが信じられない。とてつもなく遠い所に来てしまったような気がした。孤独が、にじり寄ってきた。

「ガルネッコ」のマスターから聞いていると言って優しく案内してくれたご婦人に、教会を訪ねた話をすると、「地上で一番美しい教会よ」と、こともなげに言った。試飲させてもらっているキャンティが美味しい。あの嘘のない味がした。

片手に2本のキャンティをさげて、教えてもらった通りのバス停への坂を下りていく。右側に小さな立て札があった。「ポリツィアーノの生家」。アッと、息をもつまる思いだった。メディチ家ロレンツォ・マニフィーコの親友であり、ロレンツォが主宰したルネッサンスの極み、プラトン・アカデミアの中心人物にしてルネッサンス期最大の優雅なる抒情詩人ポリツィアーノ。この偶然に涙がこぼれそうになった。この城塞都市の一角にひっそり建つ小さな黒い石の家。閉じたドアに、今日は閉館の文字がある。窓からおそろおそろ、その暗い内部をのぞくと、この平凡な外観の奥には、ルネッサンスのもろもろの靈感が、いまだに溢れんばかりにつまっているのではという想像を抑えることができなかった。

日陰の石畳は、冬の冷気を残し、スニーカーの下からジワジワと寒さを伝えるが、陽の当たる片側に身を寄せると、太陽は、またたく間に全身を光と温もりに変えた。

2時のバスまでの間、パニーノをかじりながら、温まった大きな岩に腰かける。山のふもとまで続く、遠く光るオリーブとワイン畑を過ぎる風をみていた。後ろを振り向くと、モンテプルチアーノの城壁が、無言のままにそびえている。音はなかったが、胸の奥から何かが湧いてくるような気がした。すると、静かな低温で歌う旋律が聴こえてきた。哀しくて歌わずにいられない歌が。もちろん声にはならないが、風には、軽やかに乗っていた。遠いはるかなるルネッサンスの彼方から吹くこの風に。

エンリコ・ラバが、わかった気がした。